

映画ファンを魅了する 巨匠・市川崑監督の華 麗な映像詩！

日本を代表するフィルム・メーカーとしての市川監督。50年にもわたる監督生活の底に流れるのは、疲れを知らぬ若々しい映像感覚だ。「犬神家の一族」「細雪」「おはん」など古典的な素材を今日的に蘇えらせる手腕において、市川監督の右に出る者はいない。

昭和31年に、市川監督は一度同作品を演出し、ベネチア映画祭でサン・ジョルジオ金賞を受賞するなど、傑作の名をほしいままにしている。しかしそれでも同監督にとつて「悔いの残る作品」だったという。培った映像手法を一挙に注ぎこんだ、市川崑監督のライフワークだ。

平和と愛に溢れ 心ゆさぶる感動の名作！

原作は、故・竹山道雄氏が昭和22年から雑誌「赤とんぼ」に連載した児童文学作品だが、平和と人間愛というヒューマンな内容で、明日への希望を失っていた人々に深い感動を与え、現代日本文学の傑作と呼ばれる気品に溢れた作品である。

物語の舞台は、1945年夏のビルマ戦線。英国軍の攻撃が日まに激しくなり、日本軍はタイ国へ撤退を開始した。そんななか、手製のたて琴に合わせて歌を歌う一部隊があった。井上小隊長が兵士たちを励まし、荒れすさむ戦場で心をいやすため、歌を教えこんだのだ。そしてたて琴で伴奏するのが、水島上等兵だ

った。やがて国境近くで終戦を知った小隊は、武器をすて投降した。

小隊は全員、遠く南のムドンに送られたが、水島だけは附近の山で抵抗を続ける日本軍に降伏をすすめるため、ひとり隊を離れていった。しかしそれ以来、彼の消息はぶつたりと絶えてしまった。

終戦の安堵感につつまれながらも戦友たちは水島の安否をきづかっていた。生きているのか、死んだのか。生きているとすれば、なぜ自分達のもとに帰らないのか。

労務作業中、戦友たちは青いオームを肩にのせたビルマの青年僧とすれ違った。水島そっくりのお坊さんだった。もしかしたら、水島本人ではないか、小隊はなんとか青年僧のことを知りたいと思った。そして日ごとにつれ、青年僧が水島であると確信するようになった。

ともに帰国しようとして「はにうの宿」の歌を合唱して、水島に呼びかける戦友たち。そして、涙とともにたて琴を鳴らし、これにこたえる水島。しかし戦場に散った同胞を弔うためビルマの地に残る決意は変らない。静かにジャングルに消えたあと、戦友たちに届けられたオームが叫ぶ。「アア、ヤツパリ、ジブンハ、カエルワケニハ、イカナイ」

国境を越えて、男たちの 魂の旋律を伝える名曲 の調べ！

軍歌は歌わず、「旅愁」「朧月夜」「荒城の月」などの名曲を戦場で歌いつづける井上小隊。隊員は歌が好きだったし、歌に救われることも多かった。戦場は孤独だった。そして戦いの終りを告げたのも「はにうの宿」の調べだった。

宿」の調べだった。

戦争をテーマにしながら、全篇に名曲の調べがあふれ、男たちの魂の旋律がせつせつと、しみいるように見る人の胸に迫まってくる。日本映画界は、またひとつの、かがやかない名作を生んだのだ。

■キャスト

隊長……石坂浩二
水島上等兵……中井貴一
伊東軍曹……川谷拓三
小林上等兵……渡辺篤史
岡田上等兵……小林稔侍
馬場一等兵……井上博一
村落の村長……浜村純
物売りの爺さん……常田富士男
物売りの婆さん……北林谷栄
三角山守備隊長……菅原文太

■スタッフ

製作……鹿内春雄
企画……奥本篤志
企画……日枝松男
プロデューサー……藤井浩明
原作……角谷優
新編……荒木正也
新潮文庫
中公ともだち文庫
フジテレビ出版

監督……市川崑
脚本……和田夏十
監督……市川崑
撮影……小林節雄
美術……阿久根厳
音楽……大橋鉄矢
録音……齊藤禎一
照明……下村一夫
編集……長田千鶴子
音楽……山本直純
製作担当……吉田一夫
吉屋和彦

第1回東京国際映画祭参加作品

ビルマの竖琴

感動の調べにのせて、
この夏に贈る、限りなく熱い魂の物語

